

## コロナ下での患者さんからの問い合わせ

コロナ禍による患者会の活動を中止してから凡そ2年。

その間（特にこの半年間）に患者会への数件の問い合わせがあった。緊急事態宣言が長引くにつれ、患者さん、ご家族の不安や治療への切羽詰まった状況は日々増大しているものと思われる。

具体的に此方の情報をお届けできたものではない（特に医療的分野）ので、事例のみ紹介。

○眩暈や手指、足の痺れあり、地元の病院を受診。本島でがん治療中のこともあるが、痺れの症状とがんの関りについては主治医による精密検査が必要だと言われた。

受診した病院から痺れを抑える薬を貰って取り合えず服用。本島での精密診断できる日を待っている。

○前立腺がんの患者さんより

以前、前立腺肥大の症状があると言われ治療をした。

その後（9月初旬）前立腺がんが見つかった。コロナ禍の中で、検査は何とか終えたが、手術は10月に入ってからと言うことで、現在様子見をしながら手術待ちである。

○乳がんの患者さん（ナース）

・相談の時点で、術後半年。放射線、科学療法の為、頭髮が抜け鬘使用中と話して下さった。

・1か月後には職場復帰の予定ありとのことで、子育てや勤務についての思いや不安などをお聞きした。

○ご家族より

①ご主人が腎臓がんで、ステージ2と言われた。担当医は投薬で状況の改善を見ることができた。

・ご主人の気持ちの落ち込みが大きく、家族として何ができるのか、何をしたら良いのか解らず電話を下さった奥様ご自身の苦悩を話された。

※2度ほどお会いして、情報（資料）提供と家族の気配りや気持ちの在り方について話しあった。

※今後の就労について、職場での理解を求める方法や勤務状況の軽減等について、相談できる部所もあるということだったので、家族が連携しながらお話を進めてみるように就労支援も提案。

②父親が胃がん、手術は無理だとの事。胃瘻と点滴で栄養、体力維持。

・医療的なアドバイスは無理なので、お父さんの状況を受け入れるために、家族の方のお気持ちを優先。患者会で胃がん罹患後、お元気になられた方を紹介、お話ししてみることをお勧めした。

③娘が乳がん 離島の方（母親）の連絡。娘さんは本島在住。小さなお子さんがいる。

・コロナ禍の中、家族の手術の立ち合いが出来るか不安。

・安心して治療できるようお祖母さんの協力が必要、治療については医療者に預けるしかないことを話し合い。気丈な方なので、娘さんお孫さんのことをしっかり見守って下さると期待。

○ご遺族より

① 奥様が乳がん罹患で3年半ほどの闘病。3か月ほど前にお亡くなりになった。

・お電話下さった方の現在の状況として、生きる事への気力が無く、生活すべてに喪失感を感じている。

・子供もいないので、生活の生き甲斐を見つけられない。

※遺族としての立場で、共有できるお気持ちを話しあい、遺族の立場で話したフォーラムの原稿をお届けした。「気持ちが楽になりました」とメールでのお返事を頂いた。現状を受け入れ、1日も早い心の開放と共に前に進んで頂きたいと願っている。